

ひと・まち・自然

トラまちPress

(財)世田谷トラストまちづくり情報誌

Vol. 3
September 2009



特集

世田谷の自然を 次世代に引き継ぐ

自然を実体験した子どもたちは
新しい「里山」に通じる未来の守り人

せたがや散歩日和

第3回 大木をめぐる

千歳船橋駅～桜丘宇山緑地～馬事公苑へ

結び葉

第3回 河原正幸さん

住宅街の畑で地域住民と触れあう



特集

世田谷の自然を 次世代に引き継ぐ

世田谷区は東京23区の中でも川や湧水、樹林地などの自然環境に恵まれている。貴重な動植物が生息できる環境を守り育てていくには、自然と人びとの持続的な関わりが求められる。今回は世田谷のみどりと水を守り、生き物を守り育てて、次世代へつなげていこうとしている区民の活動の場を訪れた。



左／みつ池の森に春を告げる野生ランの仲間エビネ。
右／見かけることが少なくなったクワガタもいる。

ボランティアの手によって、緻密な調査・保全が進み、多様な動植物が生きる深く豊かな森「神明の森みつ池」。

里山の世界を次世代へ

「おじいさんは山へシバ刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」

誰もが知っている昔話、桃太郎の冒頭だ。今、シバ刈りといえばほ

んどの人が思い浮かべるのは、芝草刈りだろう。だが、ほんの

40～50年前までは、里山で燃料にする小枝をとることがシバ刈りだった。昔話に出てくるほど身近な山、里山は日本人の暮らしに欠かせないものだった。

薪を採り、炭を作り、落ち葉

は作物の肥料に。定期的に木を伐採することで、里山もまた地面まで日が入り、多様な植物が育つ。人は里山に支えられ、里山もまた、人によって支えられてきた。人の営みと生き物が歩調を

合わせてきた長い年月。

やがて人びとの生活が都市化していく中で、互いに寄り添っていたはずの山や川から人は離はりはじめる。そして人の手が入らなくなつた。里山は、徐々に荒廃していく…。



Conserve
Setagaya Natural Habitats
for Next Generation

多様な生き物が息づく
神聖な森を守る

成城学園前駅から歩いて10分
ほどにある成城みつ池特別緑地
保全地区。現在2ヘクタールが特
別緑地保全地区に指定され、そ
の内6345平方メートルが神明
の森みつ池特別保護区となっ
る。普段は一般には公開されてい
ないエリアだ。

この森に歩足を踏み
入れると、「静謐」とい
う言葉が浮かんでくる。
濃いみどりの中、かつては
水田に引き入れる前に湧
名前の由来ともなった3
つの池の跡、そして水神
様を祀る祠。そこに木も
れ日がさし込むと、幽玄
の世界に迷いこんだよう
な感覚にとらわれる。ひ



1 区画を区切って植物
の量や質の変化を調
査する。2 人の手によ
る保全が進み明るい
森になった。3 野生ラン
の仲間「キンラン」。
鮮やかな黄色の花が
印象的。4 腐葉土の
寝床で眠るカブトムシ
の幼虫。

と目で、昔から人びとが神聖な
場所として大切にしてきたとい
うことが感じられる。
「成城みつ池を育てる会」代表の
中川清史さんにお話を伺った。

「ここは、自然発生のゲンジボタ
ルが生息する、23区内でも大変

珍しい場所です。春には、可憐な
黄色い花をつけるキンランも自生
し、貴重で、多様な動植物の宝庫
になっているのです」

しかし、ここが最初から現在の
ような「静謐」な森だったわけで
はない。特別保護区になった当初

ラスト協会が植物ボランティアを
募り、元来あった植物の調査をし
ながら、手入れを始めた。気の遠
ざしにより、保全が進む中で、地
面に日光が届き、今までそこには
なかつた花が咲きだした。花が咲
けば、そこに虫や蝶が寄ってくる。
ボランティアがそれを記録する。
やがて住民主体の「成城みつ池を
考える会」が発足し、植物の生
息状態を把握するために、専門
的な調査も広範に行われるよう
になった。森の生物の多様化とと
もに、森の守り人たちも成長し
てきたのが、このみつ池なのだ。

2003年には「成城みつ池
を考える会」から、「成城みつ
池を育てる会」と名称を変え、
現在では、会のボランティアが
月に3回ほどの生物調査や、
管理作業を行い、年に4回の一
般開放日のサポートもしている。



1 群れ飛ぶコアジサシ。
川魚を捕まえるのが上
手だ。2 ボランティア
に見守られ、河原で子
育てをするコアジサシ。
3 「あ！ いたいた！」発
見の連続だ。



野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

発見が教えてくれる野鳥のいる風景

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

は野川、仙川、多摩川、砧公園の
観察・調査記録。「保全」は野鳥
の繁殖地の保護活動や、野鳥のた
めの植物の保全活動などだ。

風が吹き渡る二子玉川の多
川べり。今日は野鳥観察会の下
見の日だ。歩き出すとすぐに「お
お！ いたいた」という声がする。
白いブーメランのような優美なか

どんなどに周囲が変わつても、神
聖な森を愛する人たちの手によ
つて、この地の自然は守られていく
ことだろう。

2007年には、八王子にある
首都大学東京付属の牧野標本館
にみつ池の植物180種類あま
りを収蔵してもらった。「これで
100年後にも、ここにどんな植
物があつたかを公に知ることがで
きます」と中川さん。

「ここは特別保護区なので、普段
は公開されていません。そのため、
次世代の担い手へ向けて、開かれ
た仕組みをつくっていくのが今後の
課題です」

どんなに周囲が変わつても、神
聖な森を愛する人たちの手によ
つて、この地の自然は守られていく
ことだろう。

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して知る
身近な自然

1991年に発足した「野鳥ボ
ランティア」は、「伝える」「調べ
る」「保全」を3本柱に、20年近
くの長きに渡って活動してきたゲ
ループだ。

「伝える」は小学校の課外授業
での野鳥観察会など、「調べる」

野鳥を通して

楽しむことから始まる
身近な川への想い

鎌田の多摩川の川べり、目印の木の下に「せたがや水辺の楽校」の手づくりの幟がはためいている。暑い夏の1日が始まる。親子連れがあちらこちらから集まつてくれる。今日はガサガサとテナガエビ釣りだ。川べりの場所へと移動する。浅瀬にロープが張られ、準備万端。説明を受け、いざ川の中へ。

ひんやりした川の水と、ヌルッとした川底の石の感触に戸惑いながらも、片手に網を持ち、チャレンジだ。苦戦する親子に、大学生のボランティアが極意を伝授。と、次々とあちこちで獲物がかかりだす。このあたりからお父さんたちに火がつき、がぜんテンションが上がりだす。

「あ！そつちそつち！そこにいるぞ！」と、叫んでるのは、子どもではなくお父さん。魚を触ったことがないと、逃げ回っていた中学生の女の子。怖がりながらも、人生で初めて魚に触り、やがてアナを手づかみしていた。大人も子ども驚きと発見の連続だ。

昨年は週上したアユを地元の

おじさんたちから分けてもらつて、皆で焼いて食べた。かつて昭和30年代には、「巨大なドブ川」と呼ばれた多摩川からは想像もつかない光景だ。国土交通省の事業である「水辺の楽校」は、子どもたちの自然体験、学習の場だが、同時に多くの大人を魅了し、地域の

おじさんたちから分けてもらつて、皆で焼いて食べた。かつて昭和30

年代には、「難しいことは抜きに、まずは子どもやお父さん、お母さんに川底のヌルヌル感や、水の感覺を味わつてもらいたい」と話す。すぐ近所に住むという参加者のお母さんも「川は危ないし、人目もないから近づいつながらをもたらしているようだ。

代表の中西修一さんは「難しいことは抜きに、まずは子どもやお父さん、お母さんに川底のヌルヌル感や、水の感覺を味わつてもらいたい」と話す。すぐ近所に住むという参加者のお母さんも「川は危ないし、人目もないから近づいつながらをもたらしているようだ。

つながりをもたらしているようだ。代表の中西修一さんは「難しいことは抜きに、まずは子どもやお父さん、お母さんに川底のヌルヌル感や、水の感覺を味わつてもらいたい」と話す。すぐ近所に住むという参加者のお母さんも「川は危ないし、人目もないから近づいつながらをもたらしているようだ。

つながりをもたらしているようだ。代表の中西修一さんは「難しいことは抜きに、まずは子どもやお父さん、お母さんに川底のヌルヌル感や、水の感覺を味わつてもらいたい」と話す。すぐ近所に住む

お父さんも夢中になる川の楽しさ



1 大人も子どもも川に。獲物はいるかな？ 2 エサのミミズって針つけづらいね。3 晴天のもと、手書きの幟が目印だ。4 代表の中西さんから捕まえた生き物の名前と生態を教わる。皆真剣そのもの。



見守られ、育つ。地域の宝もの イチリンソウは地域活動のシンボル

小田急線成城学園前の駅からも、祖師ヶ谷大蔵の駅からも徒歩で15分ほど、世田谷通りと国分寺崖線をまたがつたところに大

蔵団地がある。50年近い歴史がある団地内は緑が濃く、庭先には色とりどりの花々が植えられ、とても静かだ。

この自治会の宮崎春代さんは1964年に入居した。団地の中に保育園を開設する活動や、砧

南中学校の創設にも関わり、子育ての忙しい時期を地域と共に過ごしてきた。いわば地域活動の先駆的存在だ。1989年、世田谷区から「大蔵三丁目公園を住民とのワークショップで改修していくましょう」と、自治会に提案があった。当時団地の中にある崖線はうつそうとした数だった。身

近にある自然をどう生かしていくか、宮崎さんたちは、地元中学校の理科の先生も加わった植物観察会を何度も開いた。そこで、人の手が入ることで、生き物の種類も増えていくということを学び、その体験をもとに公園づくりに参加した。

そんなおり、崖線の中に自生していたイチリンソウが6株偶然発見された。見過されていたかもしれない小さな植物が、地域活動の賜物として住民に見守られるようになった。それから20年。イチリンソウは大蔵三丁目公園内の湧水の脇で、23区内で唯一ともいわれる大群落に育っている。

現在では、イチリンソウの保全は「せたがや自然環境保全の会」に委ねられ、群落地は年に1回草刈りが行われている。地域の人び

と見守られ、その数を増やしてきたイチリンソウ。来年の春もまた白い可憐な花を咲かせて、私たちを楽しませてくれるだろう。

今は、テレビをつけると「CO₂削減」や「エコ」という言葉があふれている。質問すればすらると説明できる子どもも大人も少なくないだろう。

それは悪いことではない。

だが、そこに「水の冷たさ」や「むせかえるような草いきれ」といった、足を運ばないと感じられないものはあるだろうか。幸いなことに、世田谷には人びとが手を入れ、守り育てている自然に触れることができる場はたくさんある。

環境保護の大切さを頭で理解することも大事だが、身近にある森や川の扉はいつでも開いている。子どもたちにはその扉を通って、吹き渡る風や水の流れや冷たさ、そして樹木や草花の息づかいや虫の鳴き声を体中で感じ取つて、未だ知らない世界を発見する。その扉は新しい「里山」に通じている。かも知れないのだから。



1 20年かけて群落地となったイチリンソウ。
2 春先に行われるイチリンソウの保全活動。芽を傷つけないようにして、
慎重に雑草を除いていく。
3 小さな白い花は「スプリングエフェメラル＝春のはかない命」とも呼ばれる。

は子どものころからの参加者だと、が増えたことがありがたい」といふ。実際、以前よりも川で遊ぶ子どもが少しずつ増え、釣り人や漁協の人、川べりの人、皆が見守ってくれるネットワークができてきているという。

極意を伝授してくれた大学生は子どものころからの参加者だと、が増えたことがありがたい」といふ。実際、以前よりも川で遊ぶ子どもが少しずつ増え、釣り人や漁協の人、川べりの人、皆が見守ってくれるネットワークができてきているという。

ではダメ、そんな川の近くに住むのつどうなの？」と思ったこともあります。でも、水辺の楽校おかげで、顔を知っている近所の方々

が増えたことがありがたい」といふ。実際、以前よりも川で遊ぶ子どもが少しずつ増え、釣り人や漁協の人、川べりの人、皆が見守ってくれるネットワークができてきているという。

ではダメ、そんな川の近くに住むのつどうなの？」と思ったこともあります。でも、水辺の楽校のお

かげで、顔を知っている近所の方々

が増えたことがありがたい」といふ。実際、以前よりも川で遊ぶ

子どもが少しずつ増え、釣り人や漁協の人、川べりの人、皆が見守ってくれるネットワークができてきているという。

ではダメ、そんな川の近くに住むのつどうなの？」と思ったこともあります。でも、水辺の楽校のお

かげで、顔を知っている近所の方々

あなたは多様な生きものの中の一つです

生命誌研究者
中村桂子

落葉掃きは日常のリズムの一つ

我が家は玄関先はいわゆる吹きだまり。風が吹くと落葉がたまります。桶屋ではないので、風が吹いた時にたまるのはお金ではなく落葉というわけです。気になるとホウキを持ち出します。掃除は終った後の爽快感が何ともいえず、そこでお茶を一杯いただけば、幸せな気持になるからです。ところで、自然はいつも動いていますので、これで終りとならず、しばらくするとまた吹きだまりができるのが問題です。ここで「なんと面倒な」と苦々しく思つてしまったら、こんなものにはつきあえません。

落葉を辞書で引くと、「秋から冬にかけて散る葉」と書いてあります。春だつて夏だつて葉は落ちます。植物は、生きているのですからあたりまえ、一年中、落葉掃きは続きます。しかも風も樹も私たちの都合などお構いなしですから、なんでこんな忙しい時にと思うことがないといません。でも、樹々の間を吹き抜けてきた風に頬をなでられる時の心地よさを思うと、落葉も愛しくなります。落葉そのものも、よく見るとさまざまな形や色をしており、楽しいものです。花や実が混ることもありますし。しかも庭の隅の落葉だめに移せば、腐葉土になつて役立つてもくれます。そんなわけで、私の中では落葉は生活の一部、落葉掃きは日常のリズムの一つです。幸いご近所も、私以上にこのリズムを持つている方ばかりなので、困つたなあ今日は時間がないなあと思つていると、いつの間にかきれいになつていてる時も少なくありません。本当にありがたいことです。

人間は一番最後に登場した生きもの

世田谷区は23区の一つでありながら、幸い自然に恵まれています。ですから、私と同じような感じで日常を送っている方が多いだろうと思います。しかし最近は、このリズムが持てず、落葉への対応が面倒だから樹を伐つて欲しいという声さえ時々聞こえて悲しくなります。そんなふうに見られてしまう樹が可哀想という以上に、そのようにしか思えない人は本当に生きていることになるのだろうかと気になるからです。

私たち人間は生きものです。そんなことあたりまえ、今さらいわれなくてもわかっているといわれそうですが、そのあたりまえのことを丁寧に考えてみたいと思います。生きものであるということは生れてくるということ、あなたがここにいるのはご両親あることです。ご両親もまたそのご両親あつての存在。こうして辿つていくと、人類の祖先にまで戻ります。少々話は大げさになつてきましたが、ここでちょっと加えるなら人類の祖先は二つ、世界中の人が、20万年ほど前にアフリカで生まれた人の子孫であり、仲間であることは確実になつてきました。さらに辿るとチンパンジーとの共通祖先が見えてきますし、ついには38億年前に生れた全生物の共通祖先へと続きます。つまり、あなたがここにいることを支えている存在を辿つていくと、地球上の生きものすべてが登場するのです。

最近は、生物多様性という言葉をよく耳にするようになります。した。現代社会は、自然と離れた便利な生活こそ進歩している

として大都会をつくつてきました。鉄とガラスで高層ビルを建て、これぞすばらしい街としてきました。しかし、それが行き過ぎてしまい、環境問題が生じ、暮らしにくくなつてきたために、慌てて自然を守りましょうということになつたのです。遅すぎるとはいえ、自然の大切さに気づいたのはよいことです。しかしこで、人間のために多様性を守ることが大事だという考え方が見えるのがになります。多様性とは、他の生きもののこととしか思わず、私たち人間は他の生きものがつくりあげてきた地球生態系の中に番最後に登場した生きものだという視点が欠けていました。謙虚さが感じられません。

自然に向かえば街に笑顔がふえる

最初に、人間は生きものだと書きましたが、それは、私たちは多様な生物あつての存在であり、それなしでは生きてはいけないということです。とくに植物は私たちの生活を支える基本です。光合成によって大気中の酸素を生み出し、食べものをつくってくれている……光合成のメカニズムは最近解明されてしまつたが、これを真似た技術は開発できません。酸素と食べものは植物なしでは生れないのです。最近、ミツバチが消えて大騒ぎになつていますが、植物が育つには昆虫が不可欠……こうして見ていくとさまざま生きものの関係と、すべての生きものの大切さが見えてきます。くり返します。私たち人間がまずあって、そのためには生きものがあるのではなく、他の生きものがつくれている系の中に私たちが仲間として登場したのです。仲間に入れていたら気持ちが大切です。

ここまで、多様な生きものの中の一つとしての私たちについて述べきましたが、生きものはそれぞれ自分の特徴を生かして生き

ていくものです。人間は、文化や文明を持つのが特徴であり、自分たちが暮らしやすい自然の姿をつくりあげてきた歴史があります。これは他の生きものとはまったく違う私たちの能力です。他の生きものを大切にしたうえで、自分たちが心地よく暮らす方法を探り、実行してきたのです。日本の文化は、とくにこれをみごとに進めてきました。美しい自然をつくりてきたともいえます。ところが、この半世紀ほど、私たちは便利さだけを求めてこの歴史を忘れてしました。私たちの心の中に存在している、自然と共に生きることの快さを思い出そう、自然と向き合うと面倒なことも多いけれど喜びも大きい、ボランティアで活動していくらしやる方の笑顔のすばらしさを見る度に思います。

皆が自然に向かうということは、街に笑顔がふえるということです。誰にでも心の奥に自然を愛する気持はあるはずです。だつて生きものなのですから。特別な誰かではなく、区民すべてが自分の生活の中で生きものの感覚を生かすことは、実はそれほど難しいことではないはずです。美しい花や動物たちはもちろん、落葉も好きになるというだけのことなのですから。



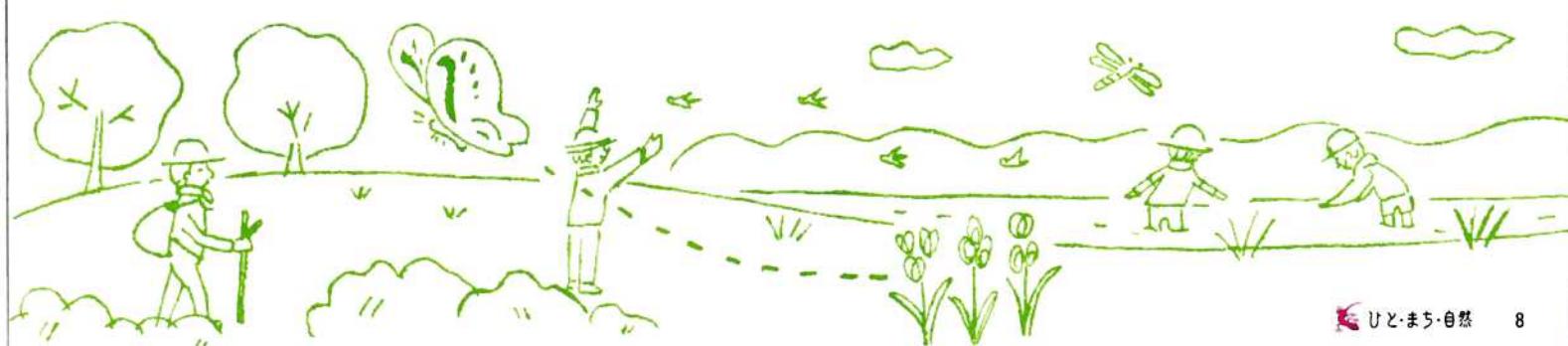
中村桂子●NAKAMURA,Keiko

1936年東京都生まれ。
東京大学理学部化学科卒業、
同大学院生物化学修了。理学博士。
三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、
早稲田大学人間科学部教授、
大阪大学連携大学院教授などを歴任。
現在、JT生命誌研究館館長。
主な著書に『生命誌の世界』(日本放送出版協会)、
『「生きもの」の感覚で生きる』(講談社)、
『ゲノムが語る生命一新しい知の創出』(集英社)
『子ども力』を信じて、伸ばす』(三笠書房)などがある。



Conserve
Setagaya Natural Habitats
for Next Generation

特集 世田谷の自然を次世代に引き継ぐ



住宅街のオアシス

千歳船橋駅から桜樹広場へ

小田急線・千歳船橋駅で、案内役の津藤さんと待ち合わせて、さっそく散歩に出かける。駅前の通りを渡り左に折れて古木2本を発見した。

「マンションは新しく建て替えても、サクラは残してくれたの

ね。嬉しいわね」

スタート直後の大木の出現に、津藤さんの顔もほころぶ。右に折れて商店街を歩いていると、マンションの軒下で、ツバメの巣を見つけた。大きな口を開けてせがむ雛たちに、母鳥がせわしなく餌を届けている。普段のように急ぎ足で通り過ぎていたら、こんな光景にも出会わなかつただろう。

突き当たりを右に曲がると、見えてきたのは稻荷森稻荷神社。入ってすぐ目の前に飛び込んできたのは、イチョウの大木だ。幹の太さは約2.9m。根っこが地面から盛り上がり、うねるように四方に伸びているのが迫力満点だ。天を仰げば、はるか頭上の枝からも、乳房のような気根が無数に垂れ下がっていた。かつて境内に

木をなしている様な姿が圧巻だ。この時季には見られなかつたが、珍しい青い花をつけたサクラもあるという。

「昔は、もっと元気があったでしまったが、残ったこのイチョウの大木が地域の人びとを見守っているようだ。」

津藤さんのつぶやきに、イチヨウが枯れてしまわないかと心

配になる。あらためてみどりを守つていかなければならぬという想いを強くしながら、神社の前の道を進むと、桜樹広場に出た。

かつて都営住宅のあった場所で、住民の呼び掛けによって、

当時からあつた木々が多く残されたという。ケヤキ、ムク、イチョウ、カキ、ソメイヨシノなど、小さな園内に数種類の樹木がある。とくにムクは、幹が何本もくつ

木をなしている様な姿が圧巻だ。この時季には見られなかつたが、珍しい青い花をつけたサクラもあるという。

「草取りや落ち葉掃きなどの手入れは、すべて住民たちでやっています。カキの実が色付くのも、みんな楽しみにしているそうよ。本当に地域に愛されている廣場なのね」

この日も、近所に住むおばあちゃんが、花壇の草を一心にむしっていた。

「草取りや落ち葉掃きなどの手入れは、すべて住民たちでやっています。カキの実が色付くのも、みんな楽しみにしている廣場なのね」

この日も、近所に住むおばあちゃんが、花壇の草を一心にむしっていた。



2



1 マンションの軒下で見つけたツバメの巣に癒される。
2 地表から盛り上がり四方に伸びる稻荷森稻荷神社のイチョウの気根。
3 稲荷森稻荷神社入口の鳥居脇にあるケヤキも見事な大木。
4 ケヤキ、ムク、イチョウ、カキ、サクラなど、多様な木々が木陰を作る、気持ちのいい桜樹広場。
5 桜樹広場のムクは、重なりあうように伸びた幹が迫力満点。



3



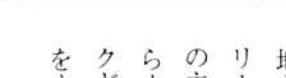
4



5



6



7



8



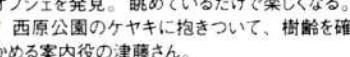
9



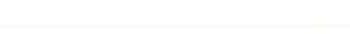
10



11



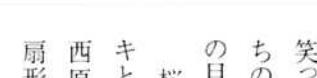
12



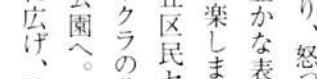
13



14



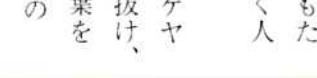
15



16



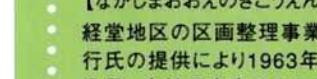
17



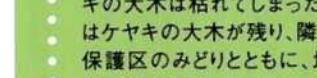
18



19



20



21



22



23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

トラスト贊助会員募集中!

世田谷のみどりや歴史的環境を守り育て次世代に引き継ぐ
「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト贊助会員になりませんか。

会員種別と年会費

・個人／年1口 1,000円	・子ども／小学校在学中全期間 1,000円
・家族／年1口 2,000円	・法人／年1口 10,000円

会員特典

- 1 トラストまちづくり課の情報誌「トラまちPRESS ひと・まち・自然」等の送付
*子ども会員へは、子ども情報誌「ちびモリ」を送付します。
- 2 財団主催イベント等の参加費の割引
- 3 財団発行図書、グッズの割引
- 4 世田谷美術館および文学館の企画展、静嘉堂文庫美術館の展覧会の入場料の割引(子ども会員は対象外)
- 5 協力店での花苗割引購入(子ども会員は対象外)

*詳しくは当財団までお問合せください。

トラスト贊助会員数 ●2009年3月31日現在 ※2008年度実績

個人	家族	グループ	法人	特別	子ども	学校	賛助会員合計
2,044	1,525	27	780	42	49	240	4,707会員

提携美術館インフォメーション

トラスト贊助会員の方は、優待制度がご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

世田谷美術館 オルセー美術館展パリのアール・ヌーヴォー
9月12日(土)～11月29日(日)
内井昭蔵の思想と建築「自然の秩序を建築に」
12月12日(土)～2010年2月28日(日)

世田谷文学館 久世光彦 時を呼ぶ声
9月19日(土)～11月29日(日)
世田谷フィルムフェスティバル
特集「名優・森繁久彌」
9月15日(火)～12月6日(日)
世田谷の書展
2010年1月9日(土)～1月24日(日)

静嘉堂文庫
美術館 静嘉堂の古典籍第8回 源氏物語の世界
9月12日(土)～10月12日(月・祝)
筆墨の美—水墨画展 第2部 山水・人物・花鳥
10月24日(土)～12月20日(日)
曜変天目と付藻茄子—茶道具名品展
2010年2月6日(土)～3月22日(月)

*展示内容等詳細につきましては直接各施設にお問合せください。

ご寄付のお願い

「世田谷のトラスト運動」は、多くの方のご支援によって支えられています。
2009年4月1日～2009年8月31日までに、16名、1団体の皆さま等から、
総額351,731円のご寄付をいただき、ありがとうございました。
今後も引き続きご支援の程、よろしくお願ひいたします。

エコポイント「環境寄附対象団体」になりました

当財団は、国の「エコポイントの活用によるグリーン家電普及促進事業」の環境寄附対象団体となり、エコポイントを利用した商品取得と同じ手続きで、ご寄附をいただくことができるようになりました。
詳細については、当財団までお問合せください、ホームページをご覧ください。

・問合せ ☎03-6407-3311 ・ホームページ <http://setagayatm.or.jp>



学生インターンシップに 5大学から6人が参加

昨年度から取り組み始めた、当財団の学生向けインターンシップ・プログラム。このプログラムの特徴は、①区民活動の現場に学生が直接関わること、②研修プログラムを学生自らがアイデアを出して企画すること、③他大学の学生との交流の機会を設けていることです。今年度は、5つの大学から6名が活動グループの現場に赴きました。



トラストまちづくり課の上半期(2009年4月から9月まで)の活動トピックスをご紹介します。

8つのイベントをつなぐ トラストリレーイベント2009

7月11日(土)第1弾「まちの生きものしらべ2009キックオフイベント」が開かれました。テレビでおなじみのプロナチュラリスト・佐々木洋さんがクイズ形式で話す生きもののおもしろ話に、子どもたちは夢中でした。続いて第2弾は25日(土)の講演会「ガサガサ探検隊」。講師は、多摩川クラブ代表で俳優の中本 賢さん。手作りの紙芝居などを折りこみ、楽しく知識を得る講演会となりました。



第17回「世田谷まちづくりファンド」 24グループに助成が決定

5月30日(土)の「まちを元気にする拠点づくり部門」予備選考会および6月6日(土)「ベーシック助成事業3部門」の公開審査会が行われ、それぞれ4グループと20グループに助成が決定しました。今回の特徴は、中・高校生による地域の子どものための活動、20代女性グループによるコミュニティカフェ運営など、若い世代からの応募があったことです。



区民と考える街づくり条例 フォーラム進行中

区が主催する「区民と考える街づくり条例フォーラム」とは、世田谷区街づくり条例のあり方を区民と区職員が共に考え、意見や提案をまとめる取組みです。6月19日(金)～10月10日(土)まで、全8回開催されるフォーラムの進行と提案のまとめの作業に世田谷トラストまちづくりが協力しています。



企業の地域貢献活動との連携 社員ボランティアを受入れ

5～6月にかけて計3回にわたり、ゴールドマンサックス証券社員の方々がボランティアグループ「成城三丁目里山づくりコア会議」の指導を受けながら、緑地保全活動に参加しました。6月19日(金)の活動では、世田谷のトラスト運動の紹介を受けた後に実際の活動を体験。ノコギリガマでの笹刈り、日本の伝統的な竹製作業にも挑戦し、この日作った竹コップをおみやげに活動を終えました。



10種類の生きものをみんなで調べる まちの生きものしらべ2009

この事業は、生きものと共生する環境づくりに関心をもってもらおうと毎年行っています。今年度の調査対象は、コウモリ、アオスジアゲハ、ヤモリ、などの10種類。食べ物や巣などに特定の環境が必要な生きものや、気候変動などで影響を受けている生きものを中心に選びました。9月19日(土)まで行われる調査結果の報告は12月中旬からビジターセンターで展示します。



赤堤一丁目 小さな森オープンガーデンを 地域と連携して開催

7月25日(土)、赤堤一丁目小さな森のオープンガーデンを開催しました。近隣の地域共生のいえ「茶論ONECOIN」「リブロニワース」も連携して、地域のいろいろな活動の現場が見られるイベントとなりました。



トラストボランティア支援グループに 2グループ加わり25グループに

新しく加わった「FOS(フレンズ・オブ・セミナー)」は、子どもたち対象の「ジュニア・自然クラブ」の開催など、多摩川を中心に環境学習活動を行っています。また、ビジターセンターの展示活動などを進める世田谷トラストまちづくり大学修了生有志からなる「トラまち大学同窓会」も新たに加わりました。



トラストボランティア 交流・連絡会を開催

お互いの交流をより深めることを目的に、今年度より各グループのさまざまな活動を知り合う現場体験方式で実施しています。7月の会では「野川とハケの森の会」が企画した野川清掃に、普段は園芸や雑木林の保全活動を行っている11名が参加しました。参加者からは「拾いにくい場所にゴミがあり苦労したが、行きかう人に感謝の言葉をかけられ、非常に清々しい気持ちになった」などの声があがりました。



タヌキ



●イヌ科

タヌキは、タヌキ寝入りやタヌキの腹鼓、タヌキ親父などの言葉や、「ぶんぶく茶釜」「かちかち山」といった多くの昔話などに登場する、日本人にとって昔から身近な存在でした。世田谷区内にも「タンチ山の夫婦

タヌキは、タヌキ寝入りやタヌキの腹鼓、タヌキ親父などの言葉や、「ぶんぶく茶釜」「かちかち山」といった多くの昔話などに登場する、日本人にとって昔から身近な存在でした。世田谷区内にも「タンチ山の夫婦

ズミ等の小動物、昆虫、カニや魚などの水生生物、果実類、そして人の残飯なども食べる雑食性です。

タヌキは、自分では穴を掘らず、他の動物が使っていた巣穴、樹木の洞などをねぐらにして

タヌキには、家族や近くに棲むタヌキ同士が、同じ場所に糞をする習性があるのを知っていますか。これは「ため糞」といつて、お互いの情報を交換する役割をしているといわれています。タヌキは順応性が高く、都会でも比較的見ることができます。ですが、もともとは森や林の住人です。タヌキが暮らせる緑地環境が残る世田谷のまち。多くの人が暮らす都会では、人と生き物が共存できる環境づくりを考えていくことが求められています。



みどりの多い緑地などのわき道。夜、散歩していると、あなたもタヌキと出会うかも。

ひと・まち・自然

トライアチPress Vol.3 2009年9月発行



発行／財団法人世田谷トラストまちづくり

編集／財団法人世田谷トラストまちづくり トライアチPress

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311、3313 Fax.03-6407-3319

<http://www.setagayatm.or.jp/>

編集協力
松井編集室

取材・文
小池良実(P2~7)、
山田奈美(P10~15)

イラスト
来迎純子(表紙、P8~9)、
南樹里(P13)

デザイン
須崎きみ江

写真
佐藤隆俊(P2~7)、
小池良実(P3~7)、
松井晴子(P10~15)

©財団法人世田谷トラストまちづくり
2009 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。